

平成 31 年 4 月 5 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02709

研究課題名（和文）ラテン語から古高ドイツ語へ：聖書翻訳における法の一致・不一致の研究

研究課題名（英文）From Latin to Old High German: Mood agreement and mood difference in the Bible translation

研究代表者

黒沢 宏和 (KUROSAWA, Hirokazu)

近畿大学・法学部・教授

研究者番号：20264468

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：聖書がラテン語から古高ドイツ語へと翻訳される場合、言語学的観点から見れば、両者の違いはどこにあるのか？報告者は、その言語学的差異は古高ドイツ語の副文に現れる接続法ではないか、と考えた。なぜなら、古高ドイツ語の副文では接続法が多用されるからである。ただし、この接続法がモダリテートを伴うケースは極めて稀で、表現内容からすれば直説法と何ら区別されない。

そこで本研究では、まず古高ドイツ語の副文に現れる接続法が如何なる場合にモダリテートを有するのか検証し、そのプロセスを解明する。次に、古高ドイツ語テキストにおいて話法化されている箇所こそが、両言語間に存在する文体的差異であると指摘する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラテン語と古高ドイツ語のテキストを精査すると、法（Modus）の一致・不一致が散見される。古高ドイツ語において頻繁に現れる接続法は、形の上ではなるほど接続法だが、意味の上では直説法と何ら変わらない。ごく稀にモダリテートを伴った接続法が現れるが、この箇所こそが言語学的観点から見れば、両言語間に存在する違いであることを指摘し、オリジナル言語の内容を正確に表現することが求められる聖書翻訳の歴史に一石を投じた。

研究成果の概要（英文）：What are the linguistic difference between Latin and Old High German (OHG) in a bible translation from Latin to OHG? This study shows there to be differences in the use of the subjunctive. This linguistic element was found to appear more often in OHG. Furthermore, in contrast to Latin, in OHG the subjunctive appears in most cases without modalities.

In this paper, the reason why the subjunctive in subordinate clauses appears with or without modalities is explored. Moreover, the study shows that the points at which modalisation is used with the subjunctive are different from the Latin original. This paper provides an insight into a controversial topic among scholars in the field, modalisation by the subjunctive in OHG.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：古高ドイツ語 ラテン語 聖書翻訳 タツィアーン モダリテート 直説法 接続法 法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古高ドイツ語『タツィアーン』は、四つの福音書を解体・再編集した総合福音書であり、ラテン語・古高ドイツ語対訳のいわゆる行間逐語訳聖書の一つに数えられている。既に報告者は『タツィアーン』において、ラテン語・古高ドイツ語間で法の異なる箇所(法の不一致)に関する研究成果を著書として出版した(Kurosawa: *Über den Modusgebrauch im althochdeutschen Tatian aus der Sicht von Modalitäten. Semantische und statistische Untersuchungen zur Modusdifferenz zwischen dem Lateinischen und dem Althochdeutschen*. Hamburg, 2009)。

この Kurosawa (2009) によれば、『タツィアーン』には主文と副文併せて 544 例の法の異なる箇所が存在し、そのうち 444 例(81,6%)が副文に集中しているという。ただし Kurosawa (2009) では、両言語間の法の不一致のみに重点が置かれ、法の一致は考慮されていない。さらに、どのようなコンテキストで古高ドイツ語の接続法がモダリテートを有するに至るのか、そのプロセスについても詳述されていない。

かくして、Kurosawa (2009)の不備を補完することによって、ラテン語・古高ドイツ語間のテキストの文体的差異を明らかにしよう、という着想に至った次第である。

2. 研究の目的

古高ドイツ語では、副文において接続法が多用される。この現象は従来の解釈では、主文への従属の目印や主文からの影響によるとされてきた。しかしながら、副文に現れる接続法がモダリテートを有しているか否かについては、ほとんど議論されていない。

そこで本研究では、先ず 830 年頃フルダの修道院でラテン語から古高ドイツ語へと翻訳された古高ドイツ語『タツィアーン』の中から、関係文・時称文・*thaz* 文に現れる接続法に焦点を当てることにした。次に、如何なるケースの場合、接続法がモダリテートを表し得るのか、その話法化のプロセスを解明し、その箇所がオリジナルのラテン語テキストとは異なっていることを提示することによって、両テキスト間の文体的差異を明らかにすることを目的とする。

尚、本研究課題は「聖書翻訳における法の一致・不一致の研究」となっているが、研究を押し進めるうちに、ラテン語・古高ドイツ語間のテキストの言語学的差異という観点から見た場合、「法の一致」箇所は考慮に値しないことが判明した。なぜなら、法が一致している場合、両言語間に何ら文体的差異は認められないからである。

3. 研究の方法

高橋は『古期ドイツ語文法』(1994:176-177)の中で、主文の影響で副文の定動詞が接続法となるのは、次の四つの場合であると明言している：

- 1) 主文の定動詞が叙想法形(接続法形)の場合
- 2) 主文の定動詞が命令法形の場合
- 3) 主文が疑問文の場合
- 4) 主文が否定文の場合

Kurosawa (2009: 148)によれば、『タツィアーン』の副文には 107 例の法の不一致箇所があり、このうち 94 例(87,9%)が主文の影響によって副文に接続法が現れているという。『タツィアーン』においては、この「主文からの影響」というファクターが極めて重要である。

そこで本研究では、先ず副文に現れる接続法を主文からの影響の有無に分けて考察した。次に、試行錯誤の結果、副文におけるモダリテートの有無を分析する際に、「モダリテートのグラデーション」という新基準を設けた。これにより、極めて繊細なモダリテート生成のメカニズムを解明し、モダリテートの「濃淡」を明確にすることが可能となった。

4. 研究成果

本研究では、数ある副文のうち、とりわけ関係文・時称文・*thaz* 文に焦点を絞り考察を進めた。その研究成果として、以下の 4 点を挙げるができる：

- 1) 基本的に、古高ドイツ語の副文中に接続法が現れていても、直説法が現れていても、そのニュアンスの違いは認められない。
- 2) 副文の定動詞が、主文の影響を受けて接続法になっている場合と、主文の影響を受けずに接続法となっている場合、両者の間にニュアンスの違いは認められない。つまり、主文からの副文への影響の有無と、副文の話法化(Modalisierung)との間に相関関係は認められない。
- 3) 古高ドイツ語の接続法がモダリテートを有するケースでは、そもそも文脈上弱いモダリテートが認められる。これに加え、接続法によってさらにモダリテートが付加される。
- 4) 上記 3) の箇所において、ラテン語・古高ドイツ語間で文体的差異が認められる。

5 . 主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計3件)

Hirokazu KUROSAWA: *Über den Konjunktiv im althochdeutschen Tatian: Vierter Teil — Stilistische Untersuchungen zur Modusdifferenz beim „thaz“-Satz* — (In: *Southern Review* No. 33, S. 57 - 71, herausgegeben von Foreign Language & Literature Society of Okinawa, 2018, 査読あり)

Hirokazu KUROSAWA: *Über den Konjunktiv im althochdeutschen Tatian: Dritter Teil — Stilistische Untersuchungen zur Modusdifferenz beim Temporalsatz* — (In: *Southern Review* No. 32, S. 17-31, herausgegeben von Foreign Language & Literature Society of Okinawa, 2017, 査読あり)

Hirokazu KUROSAWA: *Über den Konjunktiv im althochdeutschen Tatian: Zweiter Teil — Stilistische Untersuchungen zur Modusdifferenz beim Relativsatz*— (In: *Southern Review* No. 31, S. 61-74, herausgegeben von Foreign Language & Literature Society of Okinawa, 2016, 査読あり)

〔学会発表〕(計4件)

黒沢宏和：古高ドイツ語『タツィアーン』の thaz 文における接続法 沖縄外国文学会第 33 回大会 (2018 年 6 月 30 日 於：沖縄大学)

黒沢宏和：古高ドイツ語の時称文における法の用法 —条件文・関係文との比較に基づいて— 京都ドイツ語学研究会第 94 回例会 (2017 年 12 月 16 日 京都大学楽友会館)

黒沢宏和：古高ドイツ語『タツィアーン』の時称文における接続法 沖縄外国文学会第 32 回大会 (2017 年 6 月 17 日 於：名城大学)

黒沢宏和：古高ドイツ語『タツィアーン』の関係文における接続法 沖縄外国文学会第 31 回大会 (2016 年 6 月 18 日 於：沖縄キリスト教学院大学)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6 . 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。